

令和8年度 学校「学ぶ力」育成プログラム

自ら課題を見付け、自ら学び、自ら問題を解決する資質・能力

学校番号：27516

「学ぶ力」		
実態	成果	課題
実態	<p>◇昨年度は、子どもから生まれる問い(本時のねらいを達成するための、子どもが45分間持続できる追究意欲)と、45分の授業を通して得られた自己の変容の2つの視点を意識した授業づくりを通して、子どもの「学ぶ力」の育成を目指した。既習と本時の問題とのずれ、自分と友達との考えのずれなどから「比べたい」という意欲が生まれ、本時や単元の見通しを立てることで子どもの単元を通した追究意欲が持続し、自分で判断し思考する姿がたくさん見られた。また、学年の実態や教科の特性に合わせて、柔軟な振り返りの形態を教師自身が自覚し、設定することで、子どもが様々なアウトプットを通して変容を感じている姿が見られた。</p>	<p>◇「問い」は、「45分間持続する追究意欲」として「追究意欲をもつきっかけになる問題」に重きを置いて授業検討を進めてきた。全校研・部内研を通して見えてきた課題は、「問い」は初めだけではなく、展開部分(問いの解決に向かう場)あるいは終末部分(自己の変容を実感する場)など、様々な場面で形を変えて存在しており、教師が拾ったり広げたりするところまで着目しきれなかった。また、変容した実態を教師が見取り切れなかったり、気づき・学びが次の学習につながらなかったりすることが課題として挙げられる。これらの課題を踏まえて、今年度は、「学びのつながり」を意識した授業づくりを目指し、学び・習得した力を他教科や実生活で生かされるような子どもの育成を目指す。</p>
「学ぶ力」の基盤〈協働を通して磨く 相互承認の感度〉の現状と課題		
<p>◇昨年度の学校児童アンケートにおいて、「振り返りを通して、自分の伸びや成長を感じたことがある。」の質問項目に対して肯定的な回答をした割合は80%と概ね高水準ではあるが、「自分が思っていることや感じていることを人に伝えている。」「自分の意見を進んで発言しようとしている。」という質問に対しては、それぞれ75%前後と、他項目に比べてやや低い水準の回答となった。学習を通して身に付けたことを発表したり、生かしたりする力を育んでいく必要があると考える。身に付けた力や成長した自分に喜びを感じるためには、他者を意識し続ける学習が欠かせないと考える。「友達と自由に話し合っって考える」「習得したことをみんなに発表してみる」「友達の良い所を真似してみる」などの授業の中における時間づくり・場づくりを教師が意識的に設けて、展開していける授業を考えていきたい。</p>		
「学ぶ力」の育成のために着目する資質・能力		
活動を通して変容していく思いを言語化し、 次の学びに繋げる子どもの育成		
取組	課題探究的な学習の推進 に向けて	自主的な活動の充実 に向けて
取組	<p>(1) 個別探究と協働探究の活動を往還していく中で、子どものつぶやきを拾い上げて共有することを意識し、1時間の授業や単元のゴールに向けた思いに調整をかけられる授業を構成していく。</p> <p>(2) 振り返りの内容・方法を検討していく。授業や単元の中で身に付いた力を振り返るだけでなく、学びが他教科、日常生活や社会とのつながりなどを実感できるような時間と場面を設定し、子どもにとって余裕のある振り返り活動を構成していく。</p>	<p>①児童の「こんな学校にしていきたい。」「こんなふうになりたい。」という思いを実現するために、その願いに基づいた委員会活動や異学年交流の計画を立て、見直し・活動・振り返りのサイクルを繰り返していく。</p> <p>②低・中・高ブロックにおける「お師匠さんーお弟子さん」の取組を大切に、異学年間のつながりを強固なものにするとともに、児童の相手意識と、自ら工夫し関わろうとする姿を高めていく。</p>
「学ぶ力」の育成の一層の充実を図る ICTの活用について		
<p>◇学習の見通しと、足跡を明確にするために、オクリンクプラスなどのカードを用いていく。各教科における課題探究的な活動については、単元の導入で生まれた問いやゴールをもとに、単元の学習の見通しをもち、自分なりに学習の道筋を立てられるように関わっていく。その際に、自分で好きな時に開いて見返したり、書き足したりすることができるようなICTの活用の仕方を教員同士で共有を図り、より有効な手立てを構築していく。</p>		

<本プログラムの実行に向けて>

